令和６年１月３０日（火）

日刊自動車新聞　２面

日野　FCと水素エンジン　技術的見極め26年までに

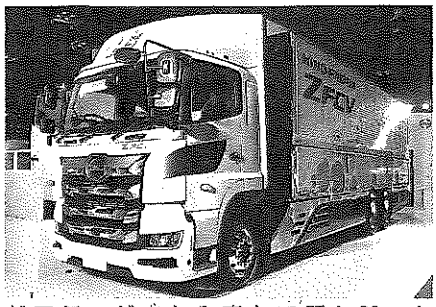
一本化か併存か　展開方法決定へ

日野自動車は、水素を燃料に用いる燃料電池（FC）と水素エンジンの技術的な見極めを2026年までに終える方針を明らかにした。同社は30年までに新たな設計思想に基づいた電動車を投入する方針を公表済み。開発や生産のリードタイムを考慮し、26年までにFCに一本化するか、併存させるかを決める。

日野自は、トヨタ自動車との共同開発によりFCVの実証に取り組んでいる。FC技術は、トヨタグループとして長年にわたる研究開発や市販の実績を持つ。一方、水素エンジンも研究開発の歴史は長いものの、一部のスタートアップをのぞき市販実績はほぼない。

日野自としては、26年までに両パワートレインの利点や課題を精査したうえで、一本化していくか、2つとも残して車型などで棲（す）み分けを図っていくか、商用車での展開方法を決めたい考えだ。

日野自が2023年10月に公表した「レンジエクステンダー（RE）BEVプラットフォーム構想」では、電気自動車（EV）やプラグインハイブリッド車（PHV）、FCVなどをそろえる。これらをトラック、バスの全車種に適用していく考え。



水素を生かすには2通りのパワートレインがあるが…（大型FCトラック）

内燃機関（ディーゼルエンジン）についても、カーボンニュートラル（温室効果ガス排出実質ゼロ）燃料や水素などの活用を視野にいれるが、エネルギー効率やコスト、耐久性、燃料の安定供給性などを見極め、FCと併存させるかどうかを判断する。

商用車の電動化をめぐっては、いすゞ自動車も25年までにパワートレイン技術の方向性を見極めていく方針を表明している。